

明治後期出版物の口絵における風俗表現

— 梶田半古を中心に —

草 薙 ら く

明治後期、口絵は、読者たちの本に対する判断基準であるほどの関心事であった。その中でも梶田半古の人氣は大きなもので、特に小説『魔風戀風』や『青春』といった「女学生」を描いたものは女学生、若い夫人などの服装に大きな影響を与えるほどであった。

梶田半古はこれまで、昭和画壇で活躍した画家たちに大きな影響を与えた人物とはされてきたものの、その画業についてはあまり論じられて来なかったが、近年徐々に明らかになってきた。しかし、口絵に関しては論じられることが非常に少ないのが現状である。

半古の口絵は、女学生の服装などの風俗に直接影響し、流行を巻き起こした数少ない例であり、半古の口絵の特徴を明らかにすることは、半古の画業を知るためにも非常に重要であるといえる。

本報告では以上のことを提示した上で、口絵とは何か、梶田半古がどのように口絵を捕らえていたのかを検討すべく、梶田半古の作品の紹介を行った。

報告以降の展開として、『前賢故実』や写生による人物表現の特徴、梶田半古が特に熱心に取り組んだ「女学生」「改良服」という風俗表現の特徴について分析を行い、梶田半古の口絵に対する使命感や姿勢を、作品の特徴から読み取ることができた。

(平成18・10・18)

ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館所蔵の日本漆器コレクションの考察

— 一九二四年発行の『日本漆器図録』に基づく検証 —

木 曾 久美子

目的 一九二四年に発行されたヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（以下V&A）の日本漆器図録の検証を通して、日本漆器収集の時代背景とその特徴を明らかにする。

概要 まず第一章では、V&A設立の歴史と共に日本美術収集の歴史を振り返り、更にそれに携わった人物を紹介する。又、十九世紀末、日本美術をヨーロッパに紹介した林忠正によりV&Aに提出された日本美術カタログの改訂版——『林覚書』——を検証し、V&Aが当時所蔵した日本美術品の概要をつかむ。

第二章では、イギリス社会における日本美術の受容の歴史を紹介する。十六世紀末の南蛮様式の漆器の輸入に始まり、十九世紀の万国博覧会をきっかけに、イギリスでは空前の日本ブームが起こり、その中で生まれた日本美術研究家や収集家により、陶磁器や漆器を中心とする工芸品が収集の対象となった。ここでは、日本の漆芸品の研究家・収集家、及び彼らの助力で行われた展覧会とその概要を紹介する。第三章では、漆芸品図録に収められた作品を検証する。特にV&Aで二〇〇六年七月に調査をした硯箱8点を取り上げ、その意匠・形態・時代の特徴から、当時の収集家が認めた日本美術の優位性を明らかにする。

(平成18・11・15)